

My Rookie Days(10) 私の新入社員時代

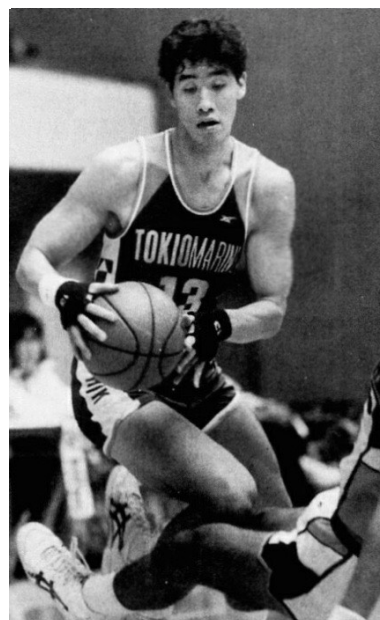


タイ国東京海上火災保険(株)
三木 晋吉

アメリカンスポーツをいつも熱く語り合っているアユタヤ銀行鱸さんからバトンを頂きました。若輩者かつアカデミックな経験も無くお恥ずかしい限りですがよろしく願います。

私が入社した1987年は有名な「バブル」が始まり株価や土地の投機が本格化した年でした。竹下登内閣の発足、「マルサの女」上映、ファイナルファンタジー初版発売、さらにはおニャン子クラブ解散等々がありました。スポーツでは野球、バスケットボール、バレーボール、サッカー等々の企業スポーツが盛んであった時代であり、当社も例に漏れずバスケットボール部が実業団（日本リーグ）に所属していました。当時は純粋なプロ契約選手といった制度は無く、新卒で正社員として入社し企業チームに所属する形態が一般的でした。私も同様に（だけではないと信じておりますが）東京海上に入社し、秋冬のシーズンには毎週末日本リーグ遠征で北は北海道から南は沖縄まで試合で飛び回っていました。平日は水曜日と金曜日の仕事後に石神井公園周辺の当社体育館で練習があり「残業で遅くなっても、接待後どんなに酔っ払っていても練習には参加する」を合言葉に夜の10時過ぎからシューティングを始めることもよくありました。

仕事面では本店営業3部という部署に新人で配属となり、新聞社、テレビ局、映画会社、広告代理店、電気通信会社といった主にマスコミ系のお客様を担当させて頂きました。週末はバスケットの遠征か練習でつぶれてしまうことがほとんどでしたが、営業という観点ではバスケットボール実業団選手というのはお客様との話題作りという面でプラスだったと思います。一方、忙しいからと自己研鑽は手を抜いていて（飲みと麻雀の時間は何か十分ありましたが）、あの頃もっと勉強しておけば良かったなあと今更ながら反省しています。それ故部下には「もっと自己研鑽するように」とある意味説得力のあるアドバイスを常々しています。当時私のポジションは「パワーフォワード」でゴール下にドリブルで突っ込んでいくプレーを得意としていたため怪我は日常茶飯事でした。大事なプレゼンの前日に2メートル10センチを超えるアメリカ人選手の肘が私の目にぶつか



り、7針縫って目がお岩さんのように腫れた状態でプレゼンに臨みお客様に本気で呆れられ上司に激怒されたこともありました。

マスコミ系のお客様故、販売する保険は一風変わっていました。例えばマイケル・ジャクソンやマドンナのコンサート、花火大会等々のイベントが悪天候・出演者の体調不良を理由に中止・延期となった場合、宇宙衛星の打ち上げが悪天候やアクシデントにより中止になった場合の費用を担保する「興行中止保険、打ち上げ保険」や映画ロケの際の出演者の傷害保険等々がありました。これらの保険は1年で満期を迎える通常の保険と違い単発の「スポット契約」であり、保険料が大きくかつ取れるか取れないかは一回限りの一発勝負という緊張感のあるものでした。お客様のニーズをしっかりと捉えられずに契約を頂けない等、失敗は数多くありましたが、海外再保険者を巻き込んでの保険の設計から海外イベント会社とのやり取り、台風による屋外コンサート中止に伴う保険金お支払い対応等々、その頃の経験が今の海外での仕事に役立っていると思います。

柔かい話題としてはテレビ朝日様と六本木の先方オフィスで面談していたところ、当時（株）新日本プロレス社長であったアントニオ猪木さんと出会い、その後呼ばれてプロレスラーになれと感激のスカウトをされたり、新しく取引を開始した映画会社様の新年会に呼んでいただき映画スターの方々とお話をする機会も頂きました。いつもは厳しい上司もこの時だけはとても優しくったことを今でも鮮明に覚えています。入社後10年間東京に勤務しバスケット選手を続け、引退してすぐにフィリピンに転勤し5年間勤務、その後アメリカにて主に自動車メーカー様をご担当させて頂き11年間勤務、そしてタイに転勤しもうすぐ3年という「日本で仕事とバスケをし、バスケット引退後は海外にて仕事」という極めてシンプルな社歴があります。もう一回人生を過ごせるのであればあの時の猪木さんの誘いに乗ってプロレスラーになりたいと今でも本気で思っています。

私の30年の社歴を通じて一番印象深いのは「ご縁」です。Steve Jobsのスタンフォード大学卒業式でのスピーチを当日ニュースで

見て感銘を受けたのは私がアメリカにいた2005年でした。彼のスピーチで最初に触れたのが「Connecting Dots」という言葉でした。これは「今つながっている見えない点（ご縁）」はその時は分からない。けれども将来振り返ったときにあの時の事象が今つながるのだと分かる時が来る。従って今行っていること（ご縁）がいつかつながると信じて大事に生きていこう。」ということだと理解しました。日本語では「袖すり合うも他生の縁」となりますでしょうか。生まれ育ったロスアンゼルスに30数年後に駐在員として戻り子供の頃お世



南野陽子さんと

話になった現地の方々と再会をしたこと、アメリカのシンシナティというアジア人の少ない街で当時地場銀行に勤めていた家内と出会い、初めての食事会で家内の父が私の兄の新入社員時代の元上司と知り驚愕したこと、高校・大学・実業団バスケットボールの対戦相手だった方とタイで再会し一緒に仕事をさせていただいていること、様々な出会いが世界中で紡ぎ合うこと嬉しく思います。もうすぐ52歳になりますが、今までのご縁が深まること、新しいご縁があることを楽しみに、そしてタイ国にて生活・仕事をさせてもらっていることに日々感謝して過ごしていきたいと思います。

次回は日立アジア（タイランド）の水谷理事にお願いする予定です。